

# 二〇二一年度・学力考查問題【国語】

(高校第一回)

## 注意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は11ページで**一・二・三・四**の四題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。  
また、特に指示のないかぎり、句読点等も一字に數えます。

線あ～おのひらがなを漢字に直しなさい。

- 友達がえんぱうからやつて來た。  
人間はげんこうの一致を目指すべきだ。  
諸外国ときよううちょうして取り組むべき課題。  
努力がとろうに終わつた。  
プレゼントをふんぱつする。

次の文章はある大学で行われた講義を書き起こしたもの  
です。よく読んで、後の問い合わせに答えなさい。

英米哲学界では有名なマイケル・ダメットの「酋長の踊り」という謎解きがある。ある部族で青年が成人するにはライオン狩りでその力を証明せねばならないので、狩り場に二日かけて行き、狩りの後二日かけてもどる。酋長は彼らの成功を祈つてその間踊り続けるが、問題は、狩りが終わつた日から青年たちが帰路にある間も踊り続けるというのである。そのとき狩りはすでに終わつて事の成否は定まつているのに、その幸運を祈るとはどうしてだ、<sup>1</sup> というのがダメットの問いである。われわれ現代人もこの酋長を笑えないだろう。列車や飛行機の事故の報を聞いた後で、それに乗り合わせた家族の無事を祈り、入学試験の合否はすでに決定済みであることを承知しつつ、なお一縷の望みをかけて祈りはしないだろうか。(『時は流れず』七〇頁)

なかなか手強いバラドックスですが、ダメットはこれを「逆向も因果 (backwards causality)」ないしは「<sup>※4</sup>遡及的祈り (retrospective prayer)」と呼んでいます。逆向き因果と呼ばれるのは、酋長の踊りが現在の行為を原因として過去を変え、望ましい結果をもたらそうとする」とだからです。またダメットが伝えるところによれば、正統的ユダヤ教神学では「遡及的祈り」を行うことは禁じられているそうです。その理由は「過去を変えることは論理的に不可能な」とである。したがつて、遡及的な祈りを口にする」とは、神に論理的不可能事を求めて、神を愚弄する」とある」(M・ダメット『真理という謎』[1978] 藤田晋吾訳、勁草書房、一九八六年、三四三頁) というところにあります。**A**、大森さんが述べていますように、どこかの部族の酋長のみならず、われわれもまた、すでに起こった事故に対して家族の無事を祈り、すでに提出した答案に対して合格を祈ることを当然の」とくやっています。**B**、そのときわれわれは逆向き因果を引き起こし、遡及的祈りで神を冒瀆するという無意味な行為をしているのでしょうか。事故の場合は無意味と言うにはあまりにも深刻な祈りですし、受験生が試験の終わつた後で合格を祈るのはごく自然な行為に見えます。問題は、いまだ誰にも知られていない過去が果たして決定しているのかどうか、というところにあります。それに対するダメットの回答は少々複雑なものですが、ここでも大森さんの簡明な回答の方を引いておきましょう。再び資料を見てください。

初めに述べたダメットの酋長が、すでに過去になつてゐるライオ

ン狩りの成功をいま祈るのは、過去自体という錯覚のもとでは確かにパラドックスである。しかし、そのライオン狩りはその時点ではまだ公認された過去物語りにはなっていないのである。つまり、まだ過去ではないのである。だから好意的な酋長が祈つてゐるのは、ライオン狩りの成功が真理条件をパスして、公認公定の過去となつて部族全員に受け入れられることなのである。そこには酋長の善意と好意こそあれ、パラドックスじみたものは何もない。／飛行機事故を知つた時点<sup>b</sup>で家族が搭乗していなかつた（過去形）ことを願い祈るのも、いまさら「後の祭り」を祈るのではなくて、家族非搭乗の過去物語りが公認されて制作されるよう願意祈るのである。答案を提出した後に、合格の採点が出る物語りの公式制作をはらはらしながら待つのは受験生すべてだろう。（『時は流れず』七四頁）

要するに、この世に生じた出来事は「過去物語り」すなわち「間主観的記憶」のネットワークの中に整合的に組み入れられてはじめて、「過去にあつた」出来事となるということです。したがつて、酋長が踊り続ける最後の二日間、家族の生死が判明する数時間、合格発表までの数週間、この期間はライオン狩りの成功も家族の生存も志望校への合格もいまだ「過去」にはなつていません。彼らのもとに一定の情報が届けられてはじめて、その事実は「過去物語り」へと編入されるわけです。〔C〕、その「編入」は過去の時点に遡つてなされます。そのことから、あたかも過去の事実が「編入」以前にすでに「確定」していたかのような錯覚を与えるのです。しかし、過去の「確定」

が「編入」の手続きと不可分であることを忘れるべきではありません。量子力学の観測問題になぞらえるならば、過去は成否不明、生死不明、合否不明といった「重ね合わせ」の状態から、観測を通じて「波束の収縮」が生じることによつて確定される、と言つてもよいかもしれません。その限りで、酋長の踊りや家族の祈りは決して無意味な行為ではありません。つまり、彼らは祈りによつて〔X〕としているわけではなく、〔Y〕を祈つてゐるわけです。

そこから一つの重要な帰結が導かれます。それは、過去命題の真偽は「過去物語り」の制作以前にア・ブリオリに決まつてゐるわけではない、ということです。事故に遭つた家族の無事を祈る人にとって、飛行機事故が生じたことは「真なる」過去命題であるにしても、家族の生存はいまだ「真偽不定」の過去命題であり、過去物語りのネットワークに編入されではおりません。それは、事故で行方不明になつた人が「生死不定」であることに似ています。〔D〕、行方不明者を捜索することに意味があるように、家族の生存を祈るという行為が意味をもつのです。それに対し、事故が起つた時点<sup>c</sup>で家族の生死は決定されているはずだと主張することは、再び「過去自体」や「神の眼」を想定することにほかなりません。しかし、神ならぬ身のわれわれにとっては、その「決定」は内容のない空虚な決定にすぎません。

（の　えけいじち　野家啓一「歴史を哲学する——七日間の集中講義」岩波書店より）

※1 マイケル・ダメット：イギリスの哲学者（一九二五～）

一一〇一一）。

※2 「時は流れず」：哲学者の大森莊藏（一九二一～一九九七）が著した『時は流れず』という書物のこと。

※3 パラドックス：逆説、矛盾。

※4 遷及：過去にさかのぼること。

※5 ア・プリオリ：先驗的、先天的。

ア 祈ることによって、目の前の不幸な状況に対し精神を安定させようとしてすること。

イ 過去の変更が不可能であると知りつつも、祈ることで自分の社会的な立場を示そうとすること。

ウ 不都合な結果を周囲に受け入れてもらうために、祈ることで自身の努力を周囲に訴えようとしてすること。

エ 祈るという行為を通して、すでに起きた過去を改變しようとすること。

問一  A  D  C に入る言葉として最も適当なものを次の中から

それぞれ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じ記号を一度使ってはいけません。）

ア もちろん

イ しかし

ウ それゆえ

エ では

問二 線1「われわれ現代人もこの酋長を笑えないだろう」と

ありますが、なぜ「笑えない」のですか。その理由をわかりやすく説明しなさい。

問三 線2「後の祭り」を祈る」とありますが、それはどの

ようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

問四  X  Y  Z に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア X 過去を変えよう

イ Y 未来において望ましい過去が実現されること

ウ X 未来を望ましいものにしよう

エ Y 幸運を得ること

ウ X 祈りの非現実性に目をつぶろう

イ Y 心の平静が実現すること

エ X 成否不明の過去について考えよう

Y 現在のこの瞬間を無駄にしないこと

問五 ~~~線a~eを内容の上で二つのグループに分けた場合の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア b・c・e/a・d

イ a・e / b・c・d  
ウ d・e / a・b・c  
エ a・b・c / d・e

## 二 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

問六 本文全体を通して、筆者は、「過去」とはどのようなものだと言つてゐるのですか。最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア

人間から独立し、そのもの 자체として客觀化されているもの。語られたものが、周知されることで事實とされていくもの。

ウ 人間との関係性はあるが、事實という点で絶対化されるもの。

エ 現在の視点に立つて構成され、作り上げられていくもの。

問七 本文から読み取れる事柄として、最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア すでに確定、承認されている出来事を、人為的に変更させようと行動してしまう側面が、人間はある。

イ 人間は、ある出来事が望ましい過去として社会的に認められるために、祈ることがある。

ウ 「真偽不明」として入つてくる情報を、過去物語りのネットワークから引き離すことで、それは事實となる。

エ 試験後に合格を祈るという行為は、迷信であり、過去を語るにあたつて意味をなすとは言えない。

織田源三郎勝長（信房）は、織田信長の五男である。彼は生母の死後、武田側の人質となり、そこで成長した。彼は様々な経験をする中で、次第に信長を恨むようになつていった。後に、織田家に復帰した彼は、信長から家督を譲られた織田信忠に預けられ、織田家に溶け込むように見せかけながら、信長の殺害を目論むようになつた。信長はある宴会のさなか、些細なことから家臣である明智光秀に暴力を振るい、けがを負わせた。その現場を見た源三郎は、敵のみならず家臣に対しても容赦のない信長の姿を見て、明智光秀に近づき、信長を討つ密約を結んだ。

五月十九日、安土での能興行をもつて家康一行の饗應を終わらせた信長は、翌日、家康一行を京都見物に送り出すと、出陣の支度に掛かった。

そして二十七日、安土を出陣した信長は二十九日、京都に入る。源三郎も、信忠に随行して妙覺寺に着陣した。

この年は和暦上、五月が小の月にあたるので二十九日までになる。

翌六月一日、信忠と一緒に本能寺に赴いた源三郎は、「名物開き」の茶会に参座した。

信長は、いつになく穏やかな面持ちで茶を喫し、居並ぶ公家や豪商たちの間にも、和やかな雰囲気が漂つていた。

一刻余に及ぶ茶会が終わり、信忠は妙覚寺に戻つていった。

一方、源三郎は信忠に命じられて道具類の片付けを指揮すべく、本能寺に残つていた。

——この名物が、明日には灰燼かいじんに帰かへすのだな。

名物中の名物として名高い九十九茄子の茶入を木箱に收めながら、源三郎は感慨にふけつた。こうした茶道具と共に一つの時代が終わり、新たな時代が始まる。その新たな時代を率いていくのが光秀なのか、ほかの誰なのか、今のところ分からぬ。

——わしにも、その資格があるというわけか。

一瞬、そう思つたが、今は一つの時代を終わらせることに集中すべきである。胸底から頭をもたげようとする何かを、源三郎は力ずくでねじ伏せた。

片付けも終わり、妙覚寺に引き揚げようとしていた時である。

「源三郎様、右府様がお呼びです」

小姓の一人が源三郎を呼びに来た。

——まさか露見したのか。

背筋に焼串を刺されたような衝撃が走る。しかし露見したのであれば、呼び出しなどせず、兵を派して、その場で捕らえるはずである。——心配には及ばぬ。

源三郎は顔色一つ変えず、信長の待つ常の間に向かつた。

「源三郎、まかり越しました」

信長が筆を擱おく。

「あと半刻もすれば、本因坊算砂が囲碁を打ちに来る。それまで話の

相手をせい」

信長は寝つきが悪い。それゆえ夜は、囲碁や将棋を打つことが多い。せつかく京都に來たこともあり、当代随一の名人と囲碁を打ちたくなつたに違いない。

——深夜まで起きているということは、信長の朝方の眠りは深くなる。

「そなたが戻つてきてから、一年と二月か」

「はい。月日の経つのは早いものです」

「その間、城介の言い付けをよく守り、忠勤に励んでいると聞く」

「至りませぬが、何とか——」

「もう武田に未練はないのか」

——己が滅ぼしておいて、今更、何を言う。

さすがに源三郎は鼻白はなびんだが、そんな感情をおくびにも出してはならない。

「武田はすでに過去のもの。いまだ血脉が続いているのなら、小なりとも家を再興いただけるよう、父上に嘆願したかもしけませぬが、ものはや滅んでしまつたものは、どうにもなりませぬ」

——おつやの方のことといい、武田のことといい、わしを恨んではおらぬのか

「恨んでおります」

源三郎は勝負に出た。

「恨んでおる、とな」

「はい。だが、恨んだところで何になるというのです。父上と刺し違えれば、なるほど仇を取つたことにはなります。しかし、それにより天下は乱れ、この世は再び群雄割拠となります。戦乱は続き、多くの民に迷惑が掛かります。それならばいつそのこと——」

信長の視線が痛い。しかし源三郎は、あえて強い視線でにらみ返した。

「織田家の天下平定に力を尽くし、民の苦しみを和らげたいと思つております」

「恨みは恨みとして胸にしまい、大義のために働くというのだな」

「仰せの通り。それがしは父上が憎い。殺したいほど憎く思つております。だが父上以外の誰が、天下を静謐に導けましょう。それを思え

ば、恨みなど些細なもの。それがしは大義のために生きたいのです」「そうか」

黙つて源三郎の話を聞いていた信長が、脇息から身を起こした。次の瞬間、信長は立ち上がり、背後の小姓から太刀を受け取るや、源三郎を袈裟に斬り捨てるかもしれない。

——その覚悟はできている。

しかし信長は、穏やかな笑みを浮かべて言つた。

「立派になつたな」<sup>4</sup>

その瞬間、源三郎は「勝つた」と思った。

猜疑心の塊で、決して人を信じず、誰にも騙されない信長だが、自

らの息子にだけは、隙を見せたのだ。

「ありがたきお言葉」

信長が、口端を歪めるような笑みを浮かべた。誰もがぞつとするほど冷たい笑みである。

「そなたが『恨んでおらぬ』と答えたなら、この場で斬るつもりだった」「えつ」

「わしは嘘をつく者が嫌いだ。嘘をつく者は、いつか裏切る。それなら芽のうちに断つておいた方がいい」

源三郎の背筋に戦慄が走る。

「そなたは、わしを恨んでおる。それでいいのだ。<sup>※6これどう</sup>惟任もわしを恨み、権六（柴田勝家）もわしを憎んでおる。藤吉郎や左近将監（滝川一益）に至つては、隙あらば、わしに取つて代わろうとしておる。だが、それでよいのだ。仲のよい主従などに天下が取れるか。憎悪でも野心でも、煮えたぎるような感情なら何でもいい。こうしたものを持つ軍団でなければ、天下など獲れぬ」

——この男は尋常ではない。しかし、その通りだ。

源頼朝の鎌倉幕府も、足利尊氏の室町幕府も、どちらも憎悪と野心をたきらせた親族や家臣たちが、互いに憎しみ合いながら敵と戦つていた。

——だからこそ、彼らは幕府を開けたのだ。

天下を取れる軍団の強さは、こうした鬱積した感情の爆発によると、

信長は気づいていた。

「わしが惟任にああした仕打ちをしたのも、惟任めの切つ先が鈍くなり始めたからだ。人は年を取ると、『もう、この程度でよい』と、つい思つてしまう。惟任もそうだった。彼奴は、わが家臣になつた頃の

ような、ぎらつくような野心を失いつつあった。佐久間（信盛）や林（通勝）のように失脚させてもよかつたのだが、あいにく彼奴の知恵は衰えておらず、また家臣たちの人望が篤いこともあり、明智の兵は強い。それゆえ彼奴の切つ先を再び鋭くすべく、何かのきつかけを捉えて、わしへの憎悪をかき立てねばならぬと思ったのだ

〔恐れ入りました〕

源三郎に返す言葉はない。

「わしを恨む気持ちを失わない限り、そなたは城介に次ぐわが息子だ」

〔それは真で――〕

「ああ、城介に万が一のことがあれば、天下はそなたにくれてやる」

〔源三郎は唯然とした。〕

――そこまで買われていたのか。

〔決戦！　本能寺〕講談社所収　伊東潤「霸王の血」より)

## 問二

――線2「源三郎は（ ）に向かった」とありますが、ここからうかがえる「源三郎」について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　急な信長からの呼び出しに驚いたものの、いつも通り信長と対面することで、信長を油断させ、計画の成功を確実なものにしようと思っている。

イ　信長からの急な呼び出しに焦り、今後の身の振り方について迷いが出てしまったが、すぐに信長の前に出向くことで、信長に対する殺害計画を隠し通そうとしている。

ウ　信長からの急な呼び出しではあつたものの、自分たちの計画を隠し通せる自信があつたので、何食わぬ顔で信長の所に出来こうとしている。

ア　新しい時代を目前にして、強大な権力を握る機会が自分にも巡ってきたと考えられるが、それよりも、父である信長の殺害を優先すべきだ、ということを強く意識している。

イ　父である、信長の殺害を遂行せざるを得なくなってしまつた状況に対する悔恨の念を捨て去り、現状を積極的に受容しようとしている。

ウ　光秀という、権力を維持できるかどうかわからない男を利用してしまつたことで、光秀に従わざるを得なくなつてしまつた自分の安易さを、何とか忘れようとしている。

エ　一つの時代が終わることへの寂しさを感じたため、自分にも強大な権力を持つ資格があることを意識しながらも、その野心を当面は自重しよう、という思いを抱いている。

問一　――線1「胸底から（ ）にねじ伏せた」とあります、この時の「源三郎」についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ※1 能興行：「能」の会を行うこと。
- ※2 右府：織田信長のこと。
- ※3 城介：織田信忠のこと。
- ※4 おつやの方：源三郎の育ての母で信長によつて殺されている。
- ※5 武田のこと：源三郎は再三、武田家の存続を信長に頼んでいたが、かなえられなかつた。
- ※6 惟任：明智光秀のこと。

工 急な信長からの呼び出しによって、自分たちの計画が露見したことを危ぶんだが、そうではないと冷静に判断した結果、何事もなかつたかのように対面しようとしている。

問三 線3 「信長が余裕の笑みを浮かべる」とあります、この時の「信長」について述べたものとして適当でないものを次の

中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 源三郎は自分の跡を繼ぐべき人間として、最適であるといふ思いを新たにしている。

イ 源三郎が抱いている激情こそ、天下を狙う集団には不可欠のものであり、むしろ、望ましいと考えている。

ウ 源三郎には自分に対する恨みはあるが、まさか自分を本当に殺害するとは思つてもいない。

エ 源三郎の自分に対する思いは当然であり、源三郎の言葉は期待通りのものであるととらえている。

問四 線4 「源三郎は『勝った』と思つた」とありますが、この時の「源三郎」の気持ちを述べたものとして最も適当なもの次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 信長を喜ばせる言動によつて話題を逸らすことができ、殺害計画が露見せずに済んだのだから、この計画は成功するし、

自分は勝てるだろう。

イ 疑い深いにもかかわらず、息子である自分の言動を信じて疑わないような信長を殺害することは、本来ならば許されないことであろう。

問五 線5 「源三郎に返す言葉はない」とありますが、この時「源

三郎」はなぜこのような意識を持ったのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が天下を取るために、家臣の心理を巧みに利用しようとする信長の能力に感服したから。

イ 墮落する可能性をはらんだ集団を、必死に一つにまとめようとしている信長の努力に感心したから。

ウ 近日中に崩れ去つていくであろう家臣團について、まじめに語る信長が滑稽に思えたから。

エ これまでなかつたような、新しい集団を作ろうとしている信長の革新性について感嘆したから。

ウ 自分の本心を隠し、斬られる覚悟で信長に臨んだ結果、信長からの信頼を得ることもできたので、今回の計画はきっと成功するであろう。

工 信長は自分の言動を大げさに評価することで、自分のことを確実に取り込もうとしているようだが、あえて抵抗を見せることで、あの男を焦らしてやる。

問六　——線6「源三郎は啞然とした」とあります、この時「源三郎」が「啞然とした」理由として、最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 親としての愛情におぼれ、敵として織田家の中にいる自分に気づくことなく、自分を重用しようとする信長の愚かさにあきれたから。

イ 信忠を差し置いて、自分に家督を譲るという信長の言葉にこれまでの恨みの気持ちがぐらつき始め、冷静に物事を考えられなくなつたから。

ウ 危害を加えようとしている敵であることを承知で、自分に家督を譲ろうとしている信長の心の広さに驚き、天下人としての人間性を感じ驚嘆したから。

エ 信長への恨みを抱き続けることが、信長の評価を得、自分が天下を率いていく可能性につながっていることを初めて知り、あまりの意外さに驚いたから。

問七 本文における「信長」と「源三郎」との関係について述べたものとして、最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 信長も源三郎も、お互いの真意がわからないまま対面を続けるうち、相手のすべてがわかりあえるようになつていて。

イ 信長は源三郎に対して寛容な態度で接しているが、源三郎はそのような信長の態度を信用できず、深く思い悩んでいる。

ウ 源三郎にとつての信長は、思いもよらないような考え方や行動をとる人間であるが、その考え方に対する感心する面もある。

工 会話を続ける中で、信長と源三郎の対立は一層激しくなり、お互いの関係はもはや修復できないほどになりつつある。

# 四

問題文〈甲〉・〈乙〉を読んで、後の問い合わせに答へなさい。  
なお、問題文〈乙〉については設問の都合上、送り仮名  
や返り点を省略した部分があります。

〔甲〕

昔、中国に三人兄弟がいた。その親の家の庭には赤・白・紫の花を咲かせ、人々がうらやむような、一年を通して花を咲かせる薙<sup>(= 薔薇)</sup>があつた。

即ち父母亡<sup>う</sup>せて後に、この三人、身きはめて貧し。相語らひてはく、「吾が家を売りて他国に移住せむ」と。時に隣國の人、三荊を買ふ。すでにこれを売りて直を得<sup>あひ</sup>。その明旦<sup>※1</sup>に、三荊、花落ち葉枯れたり。三人これを見て嘆<sup>くわい</sup>す。まだかくのごときことをば見ず、と。呪していはく、「吾が三荊、別れを惜しむがために枯れたり。吾らとどまるべし。また返りて榮かむや」と。即ち直を返す。明くる日にしたがひてもとのごとく盛りなり。故に去らず。

〔乙〕

〔注好選〕 上

枯萎<sup>レ</sup>根茎<sup>ハ</sup>燒<sup>セウ</sup>頼<sup>スイ</sup>真<sup>マ</sup>旦<sup>アシタニ</sup>携<sup>ヘテ</sup>鋸<sup>のこぎり</sup>而往<sup>キテ</sup>見<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>大<sup>イニ</sup>  
驚<sup>キ</sup>謂<sup>イヒテ</sup>諸<sup>ノ</sup>弟<sup>ニ</sup>曰<sup>ハク</sup>「樹木<sup>ノ</sup>無<sup>キスラ</sup>情<sup>ナホ</sup>尚<sup>ム</sup>怨<sup>ム</sup>分<sup>ゼラルルヲ</sup>別<sup>一</sup>況<sup>イハシヤ</sup>  
人<sup>ノ</sup>兄<sup>弟</sup><sup>ノ</sup>孔懷<sup>カイスクラヤ</sup>何<sup>ソ</sup>可<sup>ケンル</sup>離<sup>ヤ</sup>哉<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>人<sup>ハ</sup>不<sup>ル</sup>如<sup>シカ</sup>樹木<sup>…</sup>  
也<sup>ナリト</sup>因<sup>ヨリテ</sup>對<sup>ムカヒテ</sup>悲泣<sup>シ</sup>不<sup>二</sup>復<sup>マタ</sup>解<sup>カ</sup>樹<sup>ヲ</sup>即<sup>チ</sup>応<sup>ジテ</sup>聲<sup>ニ</sup>青<sup>ク</sup>萃<sup>…</sup>

門<sup>ト</sup>也。

〔瑞玉集〕

※1 明旦<sup>モトダニ</sup>：翌朝。

※2 呪して：祈願して。

※3 前漢京兆：紀元前にあつた、中国（＝前漢）の地名。

※4 訖：「終」に同じ。

※5 孔懷：兄弟や肉親などの、相手への深い情愛。

※6 純孝之門：真心を尽くして孝行する一族。

問――線1「かくの「ごときこと」とありますか。どのようない

とを指しますか。その内容について簡潔に説明しなさい。

並<sup>ビ</sup>没<sup>シ</sup><sup>3</sup>、共<sup>ニ</sup>議<sup>シ</sup>分<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>家<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>資<sup>シ</sup>産<sup>。</sup>分<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>悉<sup>ニ</sup>詫<sup>ハシメテ</sup><sup>4</sup>、  
唯<sup>タガ</sup>有<sup>リ</sup>庭<sup>ノ</sup>前<sup>ニ</sup>三<sup>株</sup>紫<sup>莢</sup>、華<sup>葉</sup>美<sup>茂</sup>。真<sup>ノ</sup>兄<sup>弟</sup>等<sup>ら</sup>  
議<sup>シテ</sup>欲<sup>シ</sup>分<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、明<sup>タ</sup>旦<sup>タニ</sup>即<sup>チ</sup>伐<sup>コ</sup>研<sup>セントス</sup>其<sup>ノ</sup>荊<sup>ヲ</sup>、經<sup>テ</sup>宿<sup>ヲ</sup>華<sup>葉</sup>

問二 線2「別れ」・4「分別」とあります。が、それはどの

ようなことを指しますか。最も適当なものを次の中からそれぞれ

選び、記号で答えなさい。

ア 荆が株分けされてしまうこと。

イ 三人兄弟がそれぞれ独立すること。

ウ 荆が三人兄弟に切り倒されること。

エ 三人兄弟が遺産を分割相続すること。

オ 三人兄弟が他国へ移住してしまうこと。

問三 線3「共議分居家之資産」は、「共に居

家の資産を分かつことを議す」と訓読します。これを参考にして、

解答欄に返り点をつけなさい。なお、送り仮名は不要です。

問四 線5「不<sub>レ</sub>如<sub>ニ</sub>樹木也。」とありますが、その解釈

として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア この木を大切にしなければならない。

イ この木を譲り渡すことなどできない。

ウ この木には及ばない。

エ この木は元に戻らない。

問五 この話について述べたものとして最も適当なものを次の中から

選び、記号で答えなさい。

ア 問題文〈甲〉では荆の珍しさが中心であるが、問題文〈乙〉では荆を失った兄弟の悲しみが焦点となっている。

イ 問題文〈甲〉では生活が困窮し荆を売ろうとしたが、問題文〈乙〉では荆を売つて豊かになつている。

ウ 問題文〈甲〉・〈乙〉では家と荆のどちらを売るかは異なるが、兄弟が強い絆で結ばれている点は同じである。

エ 問題文〈甲〉・〈乙〉では荆の扱いに違いがあるものの、荆により兄弟がこの土地にとどまつた点は同じである。

# 〔国語〕

## 解答用紙（高校第一回）

問  
一

問  
二

三

問  
四

問  
五

問  
六

問  
七

二

問

一

A

一

あ

  
えんぱう  
げんこう  
きょううちょう  
とろう  
ふんぱつ

受	驗	番	号

氏名

得点

三

問

一

問

四

問

二

問

五

問

三

問

六

問

七

四

問

一

問

四

問

五

共議分居家之資產

問

二

2

4

